

ヴィトゲンシュタインと社会科学

—— ルービンスタイン著『マルクスと
ヴィトゲンシュタイン』^[1] の紹介を中心に ——

上 沼 正 明

I. はじめに

本稿は、ヴィトゲンシュタイン (L. Wittgenstein) の哲学、^[2] 特にその「後期」哲学が社会科学に対して持つ意義の解明を目指す作業の一つである。これ迄、彼の「前期」哲学と社会科学、殊に近代経済学との関係については、幾つか論究されてきている。しかし、その「後期」哲学の意義は、とりわけ経済学の文献において、殆ど解明されていないようである。

例えば安井教授は、「経済学の内部で学派がなくなり、数学がゆるぎない市民権を獲得し、主としてワルラスの名に結びつく均衡理論が近代経済学のパラダイム (paradigm) として確立して以来 (時代的にいえばほぼ 1930 年代以来)、この経済学が意識的あるいは無意識的に立脚している立場は、論理実証主義、あるいはその系統をひく科学哲学といえるであろう。もちろん経済学者の大部分は、自分が特定の哲学的立場に拘束されているとは思っていない。多くの場合、彼はすでに一般的に確立されたパラダイムの軌道の上に立ち、その許すルールに従って研究活動を、即ちこのパラダイムの mop-up-work を続けているにすぎず、いかなる哲学とも無縁であると信じている。しかしこの mop-up-work を支えているルールの哲学的立場は、いいかえれば彼の研究活動を無自覚のうちに指導している学問観は、…(省略)… 広い意味での論理実証主義の学問観であることが多いのである」と「一般的事実」を指摘された上で、論理実証主義との関係に於てヴィトゲンシュタインの足跡をたどっておられる。^[3] そ

して特に「言語の写像理論」と「真理函数の理論」^[4]を中心とした『論考』に代表される「前期」の哲学と論理実証主義の「意味の検証理論」^[5]との関係を示唆されている。しかし、『哲学探究』に代表される「後期」の哲学については殆ど言及されていない。ただ、それが「ラムゼーとピエロ・スラッファの批判を媒介として、前期ウィトゲンシュタインの自己否定から生れ、論理実証主義の解消を一部として含む多彩な分析哲学ないし言語哲学の展開の発条となった」という指摘が、列車の客室での有名なエピソードとともに行なわれるに過ぎない。つまり「このようにウィトゲンシュタインの哲学の形成に、われわれに馴染み深い三人の経済学者ケインズ、ラムゼー、スラッファが強く絡んでいることは、興味ある事実」だが、その哲学と経済学との関係は判然としないのである。

しかし、「前期」哲学の否定から「後期」哲学が生まれたと理解する以上、その哲学がどのようなものであり、またその批判にどう答えるかは、「前期」哲学の側に立つ者ならば当然問題となる筈であろう。^[6]

また、ウィトゲンシュタインのケインズへの影響を検討された美濃口教授は、「正直に言って、ウィトゲンシュタインのケインズに及ぼした影響を知ることができなかった。むしろおたがいに自分の書いた書物を交換し合っても、相互に理解し合えなかったというのが真相のようである」^[7]と述べておられる。

しかし、ウィトゲンシュタインの哲学やそれを取り巻く当時の欧州を中心とした世界の歴史・文化的あるいは国際関係論的解明が、近年注目を浴びているミクロとマクロの関係、一般均衡理論とケインズ経済学との関連やケインズの『確率論』及び1937年のQ. J. E. 誌論文に示される不確実性や「慣習」に関する議論に、光を投げかけはしないだろうか。^[8]

また最近、経済学説史や経済学方法論の領域で、クーン、ハンソン、ファイヤアーベント及びトゥールミンなど反論理実証主義の科学哲学者による「パラダイム」や「観察の理論負荷性」などのアイデアが応用され注目を集めている。^[9]しかしこれらのアイデアの源流の一つに、これまた「後期」ウィトゲンシュタインの哲学があることは余り知られていない。^[10]

以上の問題意識からしても、ヴィトゲンシュタインの哲学が社会科学、殊に経済学に対して持つ意義を探る試みには一つの価値があると思われる。

II. 社会科学の問題

ところで、これ迄にもそのような方向の試みが、政治学や社会学において例外的ながら存在する。⁴¹⁾ しかし、それらが社会科学に対して持つ意義は判然としない。ヴィトゲンシュタインの位置がアド・ホックで、他の分野に適用できないのである。これは単に彼の哲学が難解であるせいだけではなく、研究者達はその哲学を適用しようと試みる彼らの領域の「問題」の選定のせいでもあるように思われる。問題は、根本的で包括的でなければならない。

しかし最近、その「問題」の選定が的確であり、ヴィトゲンシュタインの「後期」哲学の内容と意義を大いに理解し易くする研究が出現した。そこで以下Ⅱ、Ⅲ節では、その内の一つルービンスタイン著『マルクスとヴィトゲンシュタイン』⁴²⁾の一部を紹介してみたい。それでは本稿の問題意識との関連で以下に紹介する前に、この書の概略を示しておこう。

ルービンスタインは二つの意図を持っている。一つは、マルクスとヴィトゲンシュタインの研究の間にかかなりの類似がある事を示すことであり、二つ目はこの二人の思想家の総合を社会科学の性格をめぐる様々な哲学的・理論的論争に応用することである。その為に彼は先ず、社会科学の説明と方法をめぐる様々な方法論上の立場を二つのパースペクティブに分ける。即ち、社会科学に於る客観主義 (objectivism) と主観主義 (subjectivism) である。次に、この両者が大きな相違を示しているにも拘わらず、一つの哲学的前提を共有していると主張する。その前提とは、心身二元論 (mind-body dualism) であるという。そして、客観主義と主観主義がお互いの欠点を発き立てており、かつまた両者ともに長所を持っている以上、この対立を解消し両者の利点を生かすには、その共通の前提である心身二元論の構図を否定しなければならないのだという。そしてこの二元論の構図を否定するものとして、マルクスとヴィトゲンシュタイン（特にその「後期」哲学）の人間観・社会観が登場するのである。

以下の紹介では、前述の本稿の問題意識と紙幅の都合で、マルクスについては触れないことを予め断っておく。⁴³ では、以下にその要約を試みよう。

II.-(1) 二つのパースペクティヴ

社会科学には、二つの対立するパースペクティヴが存在する。それらは客観主義と主観主義である。この両者の間の古くからの論争は、とりわけ社会科学の説明と自然科学の説明との間の関係をめぐって行なわれてきた。即ち、自然科学の説明法が、有意味な (meaningful) 人間行動を理解するのに適切か否かが争われてきた。主に実証主義 (positivism) の影響を受けた客観主義者の大部分は、科学的方法は一つであること、即ち自然科学の「物言語」(物理学の言葉) はどんな主題にも適用可能だとする方法論的一元論 (methodological monism) を主張してきた。他方、主観主義者達は、人間の行為とその産物は有意味な性格を持つものだから、それらの説明には独特な接近方法が必要であり、またその結果得られる知識の形式は客観主義者のものとは異なると主張する。

II.-(2) 客観主義

ところで、幾つかの留保条件付きながら、客観主義は実証主義の社会科学版として特徴づけられる。その実証主義は、^{センス・データ} 感覚所与に基づく経験論、正確な定量化及び予測を導く一般法則が知識の一律な目的であるとする信念を含んでいる。要するにこの学説の中心には、科学的知識は裸のデータ (brute data) 即ち、いかなる特定の理論 (あるいは主観的解釈) から独立に明白に記述される単純な諸事実に根ざすべきだという信念がある。

科学的説明は一つであり、自然科学の方法と目的は重要な変更を加えることなく、人間社会の研究に適用できるというこの学説を明確に表明したのは、19世紀のコントと J. S. ミルが最初であった。20世紀になるとこの学説は、操作主義 (operationalism) と検証主義 (verificationism) で知られるウィーン学団の論理実証主義から支持される。そして現代の実証主義は、仮説-演繹的 (hypothetical-deductive) あるいはカバー法則的 (covering-law) 説明モデルへと結晶している。即ち、まず説明されるべき特定の出来事を記述する言明 *E* がある。次に、その出来事に先行するか、でなければ因果的に関連する特定

の環境を記述する C_1 から C_n までの一組の言明がある。第三に、 L_1 から L_n までの一組の法則的言明、即ち「 C_1 から C_n によって記述されるような出来事が起こる時はいつでも、 E で記述されるような出来事が発生する」という趣旨の普遍的な一般言明がある。このモデルを図示すると次のようになる。

$$\left. \begin{array}{c} L_1, L_2, \dots, L_n \\ C_1, C_2, \dots, C_n \\ \hline E \end{array} \right\} \begin{array}{l} \text{説明する言明} \\ \text{説明される言明} \end{array}$$

この説明モデルは、一目見てわかるように予測と密接に関連している。そこで、説明の真の目的は予測であり、予測が説明の基準となるべきだというのが実証主義者達に共通の信念となっている。例えばポパーも、「説明、予測及び検証の間に大差はない」と述べている。ともかく、多数の実証主義者にとって、科学的説明の最小限の定義は、裸のデータ（実際はそれを表現する言明）の間に上述の規則的関連性が存在することなのである。

II.-(3) 実証主義と社会科学

もちろん、厳密な意味での実証主義者をもって任じる社会学者は、殆どいないだろう。それにもかかわらず、実証主義と社会科学に於る客観主義との間には、重要な連続性が認められる。その為、多数の社会学者にとって、自然科学の方法は依然説明の理想であり、また社会過程の一般法則を作る事が申し分のない目標としてしばしば描かれている。

ところで、客観主義者は、主観主義者の最も強力な原動力となっている人間の研究に於る「心」の存在の問題にどう答えているのだろうか。彼らの答え方には大別して三通りの方法がある。第一は、人間をあたかも心を持たないかのように扱う方法である。第二は行動主義 (behaviourism) である。即ち、人間が精神生活を持っていることを認めるが、それらを記述する心理的言明は、意味を変えることなく行動に関する言明に変換することができると主張する。第三は、前述の仮説一演繹的あるいはカバー法則的説明モデルである。それは動機、理由及び意図を行為の原因とみなし、それらをこのモデルの C の初期条件の部分に分類する仕方である。ここでは目的を有するものについての説明

と物体の因果的説明とが同じ仕方で処理できると考えられている。

このような客観主義は、特に社会学に於て survey research (調査書による研究) と構造的説明の形をとっている。⁴⁴⁾ 前者は、裸のデータ間に法則的関連性を確立することを意図し、後者は、心の問題に科学的に接近できるとする考えに懐疑的で、社会に関する客観的観念を社会の構成員が抱く諸観念から分けようとする客観主義者に適合的なものである。即ち、社会構造で意味されるのは、社会構成員の信念や行為から独立で、しかもそれらに支配的影響力を行使する生活の諸特徴なのである。こうして、精神的諸性質は社会科学的説明から削除されるか、それとも社会構造の客観的特徴に従属する変数として描かれるのである。

II.-(4) 主観主義

この立場は19世紀末のドイツに現われたが、当時の支配的思潮は新カント学派の観念論であった。つまり、社会科学と自然科学を峻別する主観主義とカント主義には相通じる所があった。というのは、カントは人間主体の本質的自由を主張した観念論者だったが、これは確定的な因果法則は人間の研究の必須物ではないことを含意したからである。⁴⁵⁾ この立場の初期の主唱者は、ランケ、ヴィンデルバント及びリッケルトなどの歴史学者であった。例えばヴィンデルバントは、学問領域を一般法則の発見を目的とする法則定立的科学 (nomothetic sciences) と特定の出来事の決定的重要性に注意を向ける個別的研究 (idiographic inquiries) とに峻別した。そして彼は、歴史の研究は後者の個別的方法に属すと主張したのである。

反実証主義の第二の源泉は、解釈学の、人間行為に存在する「精神的」要素への注目であった。即ち新カント学派の人々は、人間の行為を「内的」リアリティの反映と見なすべきで、従って人間の行為や産物の研究に実証主義的接近方法は不適切だと主張した。例えばディルタイは、人間の行為は意識の表示者であり、単に観察されるのでなく解釈されるべきだと主張した。そして、この立場は二つの関連する目標を持つことになる。即ち、行為を動機によって解釈することと、その中で行為が発生する文化的脈絡を説明することである。

後者の目標から初期の主観主義者達は全体論的 (holistic) になる傾向があった。しかし、実際には主観主義者達の大半は、心理学的還元主義 (psychological reductionism) へ強く傾斜している。つまり、彼らは具体的行為者の特殊な動機が記述されなければ、社会現象の十分な説明にならないと考えている。特にこの立場の一つである現象学は、社会的リアリティは個々の社会的行為者の意識の内に存在すると考える。また、社会過程の科学的説明は行為者の主観的経験に結合されるべきだとする主観主義の主張は、常識的観念で基礎づけられない理論語 (科学的抽象語) を排除する。このような主観主義の社会学における現代版は、相互象徴学派、民族社会学的方法論及び現象学的社会学である。

II.-(5) 心の問題

このように客観主義と主観主義の間の論争の中心的論点は、社会科学の主題が持つ「精神的」性格にある。つまり人間行動の研究に於る心の問題こそ、社会科学の哲学が存在する理由であると言えよう。客観主義者は心の概念を社会科学から削除したり、あるいは心の説明を自然科学の方法へ同化しようと試みる。他方、主観主義者は、人間行動の精神的要素が提起する問題を調停することこそ社会科学の方法だと考えるのである。

II.-(6) 心一身二元論 (mind-body dualism)

このような大きな相違にもかかわらず、客観主義者と主観主義者は一つの中心的前提を共有している。その前提とは、通常の科学の諸方法では接近できないどう仕様もないほど私的な (irremediably private) 存在として心を見る考え方、心身二元論である。

この学説は周知の如くデカルトにまで遡る。そもそも知識の確実な基礎を求めた彼は、物質界も更には自分自身の身体が存在すら疑い得るが、彼自身の意識の存在は無矛盾に疑い得ないことを発見した。その帰結が、我々は心と身体を持つが、二つの間には概念的関連は全くないという見解であり、ここから唯我論が、そして他人の精神的経験を確実に知ることが決して出来ないという「他人の心の問題」が生じて社会科学者を悩ましてきたのである。

ところで主観主義にこの二元論を見るのはたやすい。他方、客観主義と二元論の結びつきには異論があるかも知れない。しかし、例えば行動主義は、この二元論のディレンマに対する解答として特徴づけられる。つまり、その外に現れた徴で精神状態を推理するという方法は、二元論からの直接的帰結であり、事実「内的」な精神状態へ至ろうと主観主義者が行なう議論と全く同一である。

II.-(7) 客観主義と主観主義の限界

人間の行為はその「有意味」な性格を考慮せず理解する事は出来ないという主観主義の主張は、極端な行動主義者を除く人々の心の琴線に触れる。また、例えば運転手の合図が、操作を加えれば腕の動きに関する言明になるという行動主義者の考えもかなり疑わしい。というのも合図を動きから分つものは、その身振りの特徴ではなく文化的規範や慣習の文脈であり、それらは解釈により理解されなければならないし、それ故実証主義の裸のデータに直せる類のものではなく、更に裸のデータさえ暗黙の解釈を通して生れるのである。また社会システムの「構造」を構成員の意図的行為や常識的信念から分つ事は困難である。更に重要なことに、客観主義は間主観的現象を個人の属性へと暗黙に考え直してしまう。間主観的現象は集合的実践の解釈による理解を必要とし、裸のデータに限定された方法論では接近できないものだからである。

他方、主観主義の限界は、第一に人々の虚偽意識や意識下に閉じ込められた文化を発見する事ができない。第二に、社会の構成員が抱く文化的信念の源を説明する理論的土台がない。第三に、個人の意識に専ら関心を置く為、文化的信念や社会組織の他の側面との関連が欠如してしまう。第四に、間主観的意味の観念が認められない。

それ故、両者の限界を克服し論争を解決する為には、両者が共有する暗黙の前提である心身二元論とその含意を否定しなければならないのである。

III. 「後期」ヴィトゲンシュタインの哲学

前述のように客観主義と主観主義の欠点の多くは、両者が共有する二元論の前提に深く根ざしている。これに対しヴィトゲンシュタインは、心は私的な存

在ではなく人々の社会的活動の属性であることを示して二元論を拒否する。そして、行為の「主観的」意味は、その中でその行為が起る行為の「客観的」システムを切り離しては確定し得ない事を示し「構造主義」と「主意主義」、「客観」と「主観」の区別⁹⁴を消去する。加えて、それらが弁証法的（dialectical）に相互依存関係にあることを以下の展開で示すのである。

III.-(1) 心と身体

ヴィトゲンシュタインは、精神の状態の属性は、ある種の身体的存在の行動に論理的に結びついている、即ち、記述的表現を使うにはその表現が正しいか否かの「規準」（criteria）が必要であると主張する。第一に、ある存在についてそれが何らかの主観的経験を持っている、例えばそれは怒っているあるいは痛みを感じていると言うためには、これらの属性が意味を持つか否かを定める根拠がなくてはならない。第二に、主観的状态は多かれ少なかれ人間に似ている生物にのみ帰し得る。人間が怒っているか否かは、彼の表情や態度あるいは言ったり行なう事柄など様々な仕方で告げることが出来る。しかし、我々は何が茶碗の怒りとみなされるのか知らない。第三に、概念にはそれに不可欠な様々な環境の特徴が存在する。例えば人間の「怒り」は人間の目標、利害、欲求などと結びついている。ところが、我々は茶碗が何に怒るのか言うことは出来ないのである。怒り得る生物は、邪魔され得る目標、侮辱され得る自我あるいは踏まれ得るつま先を持つような生物でなければならない。怒りはある環境に於て帰せられ、その環境がなくなればその意味を失なう。つまり、怒りは「生活形式」（a form of life）に織り込まれており、その文脈から切り離せないものである。

第四に、例えば恐怖を人間に帰す事は、意識の内的状態に関して何かを述べるのではなく、客観主義と主観主義のように、恐怖をどう仕様もない程私的な経験の内にあると考えるのは根本的な誤りである。というのは、恐怖の状態にあるという事は、ある特徴的行動が存在する事を伴うからである。そして精神状態と身体的状態の間に規準的關係が存在する理由は、怒ったり疲れていることの意味の一部に、これらの「精神的」状態が引き起こす行動が含まれるから

である。⁷⁷しかし、恐怖の「規準」は厳密でなく、変化し得るものである。

III.-(2) 心と行為

ヴィトゲンシュタインは二元論を攻撃して、意識、思考あるいは心は主観にのみ接近可能な私的過程ではないこと、また心の様々な性質は人間の活動に於て十分明白であることを示す。第一に、二元論は、木を切ったりボールを投げるなど社会的習慣に依存しない行為の特徴は、意図と呼び得る主観的精神的出来事がそれに先行するか伴うことだと主張する。しかし、手紙を書く際に手を動かす場合、手の動きに関連のある物は行為者の心には何もない。また、公園をぶらつく為に「足を動かす」ことを考える必要があるとは主張し得ないだろう。さらにあるケースでは、行為者の主観的経験への接近は出来ても誤導的になる。例えば知人に向かって「この阿呆」と考えながら手を振っても、その合図があざけりのサインということにはならない。第二に、有意味な会話は付随する精神的過程により他と区別されるという主張も、同様な困難に会う。例えば、ある労働者が穴を掘るよう命じられ、彼のボスが戻って彼が手で掘っているのを見たら、ボスはシャベルを使うよう「意味した」と言うだろう。この場合、話し手が自分が意味した事を主張する為に「シャベルで」という事を考えはしなかったのは明白である。この例は、何かを意味することが、精神的経験を伴わないケースが存在することを示している。第三に、有意味な会話の特徴を、精神的像の心の中の流れのようなものだとする考えも困難に会う。なるほど「赤」や「犬」を心で描くことは可能かもしれない。しかし、どんな像が光子、先取特権あるいは民主主義などの言葉を表現し得るのか。さらに、心の像だけでは、描くことのできる物にさえ意味を与えることができない。⁷⁸だからある人がある言葉を口にしている間心の像を持っても、この像は我々に彼の言葉の意味を教えてはくれないだろう。要するにヴィトゲンシュタインは会話を心の中の出来事の反映や表現とみなす二元論的考えを徹底的に拒否しているのである。そして、彼は多数の例を考察して、我々の心の中で進行しているもので我々の会話に意味を与えるものは全く存在しないことを示している。即ち、我々の意味は、我々の行動とその環境によって確立されるのである。

III.-(3) 哲学的分析と観念の理解

更にヴィトゲンシュタインは、観念を実践的生活の文脈に於て理解する事を強調する。これは、彼の言語観に於て非常に明白である。彼は言語が人間の諸活動に於て演じる役割によって理解されなければならないと主張するが、これこそ言葉の意味はその使用に於て見つけられるべしという彼の格言に表明された精神である。

この彼の意味に関する学説は、意味の問題の他の接近法を背景にすると良く理解することが出来る。まず言葉の意味はそれが表わす事物であるとする言語観がある。これは、彼自身が『論考』で主唱した見解であった。しかし彼は、『哲学探究』に於て、この一見もっともらしい言語観は見当違いだと主張する。言葉の部分集合、主に名詞に関してはこの言語観は有効に見える。もし「車」という言葉の意味を尋ねられれば、我々は車を指し示すだろう。この言葉は明らかにあの物を表わしている。しかし彼は後になって、このモデルが言語の小さな領域だけをカバーしていることに気がついた。というのは直示的定義を与えることができない言葉が多数存在するからである。例えば、「民主主義」あるいは「幸福」のような言葉が何を表わすかということは困難であるし、我々は芸術品を指し示すことができるのに対して、「芸術」という言葉は事物を表わさない。また、事実を報告しているように見えるが実際は非常に異なる機能を行なう多数の表現がある。「彼は愚者だ」という表現は、事実を記述する形式を有しているが、それがその本質的機能ではないし、私が礼儀上の問いに答えて「元気です」と言う時、私は医者に向って話す時にするように事実を報告しているのではない。

意味の問題を扱うもう一つの方法は、言葉の意味をその言葉が対応する精神的出来事だと考える仕方である。これはロックやアリストテレスの見解である。しかし前述したように、彼は、意識を人間行為に於て十分明白であると考え、行為が付随する精神的出来事から区別されるという信念を哲学的神話だと主張する。

かくして彼はこのような二つの誤まった言語観の原因は伝統的哲学の「本質

概念」にあるとして、これを排し、「家族的類似性」(family resemblance)の概念を提出し、また、「規準」と「徴候」(symptom)の場合によって交替する関係を指摘して、言葉の意味はその使用に於る以外は見出し得ないと結論するのである。

III.-(4) 社会的自我と認識論

更に彼は、上述の如く先ず觀念やイメージがあり、それに単語を張りつけるとする「私的言語」説を批判して、言語の社会的性格に我々の注意を向ける。

例えば、アフリカのある部族には色を表現する言葉が三つしかない。しかし、彼らは我々と同じ範囲の色のスペクトラムを見て、三語で表現するのではなくて、彼らの社会の「必要」(関係)を通して学習された言語によって、ただ三つの色を見ているのである、と。

以上がルービンスタインの著作の要約だが、終章で彼はヴィトゲンシュタインの認識論に触れている。最近、それをカントに結びつける研究が多いが、彼はヴィトゲンシュタインが心の人類学的性格を認め、外的世界が社会的生活様式により媒介される事を示している点で、カントよりマルクスやヘーゲルに近いと指摘している。

IV. 結びにかえて

以上、二、三節で紹介してきたルービンスタインの議論の新しさは、客観主義と主観主義の対立する者同志が暗黙に共有している前提を取り出した点にある。この問題の設定こそ、「後期」ヴィトゲンシュタインの哲学が社会科学において果し得る役割を明確にしていると思われるからである。

本稿では、I節で提起した経済学の問題とII、III節で紹介したルービンスタインの議論との直接的関連性について、準備不足で触れることができない。そこで三つの予想を述べて本稿を終わりたいと思う。

一つは、ヴィトゲンシュタインに導かれて哲学してきたという黒崎宏氏の「パラダイム論」の必然性である。少し長くなるが本稿と密接な関連を持つので引用してみたい。「一般法則を理解するという事は、それが表現せんと

する形式を示している個々の事例を理解する事に外ならない。事例抜き的一般法則の理解というものは、あり得ないのである。しかも、事例の理解を通して獲得した一般法則の理解は、その後も常に事例の理解に裏打ちされているのであり、その逆ではない。一般法則の理解には、事例の理解が先行し、常に先行し続けるのである。ここで「事例」を「パラダイム・ケース」で置き換えれば、以上で言われた事は、言うなれば、理論に対する「パラダイム・ケースの優先」という事である。もちろん、一般に「パラダイム」と言われているものは、「パラダイム・ケース」を含んだ、もっと広大なものである。しかし、ここまで来れば、もはや「パラダイム論」の必然性は明らかであろう。それは、物事を徹底して、個別において、具体において、ケース・バイ・ケースに見ようとする方法——ウィズダムの言う「ケース・バイ・ケースの方法」——の必然的結果であって、いわば「下からの方法」の必然的結果であって、物事を一般において、抽象において見ようとする方法、いわば「上からの方法」、に対して、対極をなすものである。それゆえ「パラダイム論」は、「形式主義」や「公理主義」に対して対極をなすのみならず、ヘンペルやネイゲルで代表されるような、一般法則からの推論として「説明」や「還元」を理解しようとする理論に対しても、対極をなすものなのである。¹⁹⁾

二つ目の予想は、K. O. アベルの社会科学の基底的なものとしての人類学的認識論の構想²⁰⁾である。この人類が人類であることを示されるものについての記号論的・解釈学的確認である。そして第三の予想は、「事実なるものの特性は現象間の関係という形で出現する」²¹⁾とする立場である。

こうした予想については、別の機会で論じることにした。

注(1) David Rubinstein, *Marx and Wittgenstein*, RKP, 1981. 本文献を教えてくれた中堂幸政氏との議論に、本稿は多くを負うものである。

(2) L. Wittgenstein の生涯と哲学の手際良い解説書に、黒崎 宏『ウィトゲンシュタインの生涯と哲学』勁草書房、1980年がある。また、前期と後期の連続・不連続については次を参照されたい。黒崎 宏「哲学史上のウィトゲンシュタイン」『現代思想』青土社、1980年、5巻 pp. 50-60。清水幾太郎『倫理学ノート』岩波書店、1972年。尚、Wは独語ではヴィだが、ウィと表記する例も多い。

- (3) 安井琢磨『経済学とその周辺』木鐸社、1979年、pp. 105-137。同様な立場を積極的に表明している経済学者として、福岡正夫『経済学の考え方』泉文堂、1978年、及び山田一雄 [26] などがあげられる。また、Hollis & Nell [4] も参照されたい。
- (4) 安井、前掲書、pp. 112-113。
- (5) 安井、前掲書、p. 126。また、特に、ナイト [8]、マハループ [13]、ハチソン [7]、フリードマン [1] などの経済学方法論に於る「検証」の可能性をめぐを夥しい論文を想起されたい。尚、拙稿「社会科学の方法に関する一研究」（本研究科修士論文）参照。
- (6) この問題に積極的に取組んだ例外的研究として、A. ロンカリヤ [17] や菱山 [6] がある。それらは、スラッファの方法論的基礎と、ヴィトゲンシュタインの「後期」哲学との関連を明らかにしている。特に「言語ゲーム」や「家族的類似性」などの概念により、スラッファが価格理論と所得理論を新古典派一般均衡理論のように同系の論理でとらえない理由を説明している。
- (7) 美濃口武雄『経済学史』有斐閣、1979年、p. 313。
- (8) 本稿が意図する方向の極めて優れた研究例に、種村季弘氏の「演劇の一分野としての経済学」、種村 [20] がある。
- (9) 代表例は、S. Latsis (ed.) [12] である。また、佐藤隆三 [19] も参照されたい。
- (10) 黒崎 [9] 特に p. 172~179 を参照。パラダイムという概念が不明瞭であるという、よくある批判は、フレーゲ的な概念の理解に立っている。また、そもそも「パラダイム」とは、「後期」ヴィトゲンシュタインに流れをくむ日常言語学派の推論の仕方の一つであった。E. Gellner [3] も参照されたい。
- (11) 政治学の H. F. Pitkin [15] や社会学の P. ウィンチ [25] などである。
- (12) 著者は、イリノイ大学社会学教授である。この書物のうち、本稿はⅡ節で第Ⅰ部を、Ⅲ節では第Ⅱ部のヴィトゲンシュタインの項目のみを紹介する。また、本書に劣らず風通しの良い研究に D. Phillips [16] がある。両者ともに社会学教授による研究であるが、その問題意識と適用範囲は社会科学全体をカバーするものである。後者はとくに、前述の新しい科学哲学者達の試みが社会科学に対して持つ意義を明確にし、また、マンハイムの知識社会学との関連なども論じている。さらに、ヴィトゲンシュタインの数学観や確実性の問題について鋭い洞察を示し、特に後者の問題についてはケインズやシャックルの確実性に関する議論を想起させる。
- (13) ルービンスタインは、マルクスとヴィトゲンシュタインの「総合」と言っているが、通常の意味での「総合」は行なっていない。ただヴィトゲンシュタインの哲学の先行者としてカントではなくマルクスを置いている。それ故、ヴィトゲンシュタインの議論を独立にとりあげても彼の主張は弱まらないだろう。
- (14) これらは経済学の方法に範を求めてきたのだということを想起されたい。例えば T. パーソンズの試みなど。従って、社会学だけの方法や問題ではあり得ない。
- (15) 前述の客観主義を含めて主観主義のはるかに的確な説明については富田重夫 [23]

を参照されたい。しかし、ヴィトゲンシュタインに照準を合わせる本稿の目的からすれば、このような著者の大雑把な説明で十分だと思う。

- (16) 重なり合う部分もあるが、大雑把に、右左の二項対立図式が描けよう（ルービンスタイン, pp. 24~25）。

objective	subjective
materialism	idealism
explanation (covering law)	understanding (<i>Verstehen</i>)
observation	interpretation
facts	ideas
cause	meaning
behavior	action
existence (mode of production)	consciousness (ideology)
substructure	superstructure
social organization	social psychology
structure	culture
objective (e. g., functional) system	meaningful (i. e., 'interpretable') system

- (17) 「たとえば、ある人がヘビがとても怖いと言ったのに、彼の足にニシキヘビが巻きついているのに平然と坐り彼の言行不一致への我々の驚きに困惑していたら、我々は彼の言の妥当性あるいは彼の言葉の能力を疑う。というのはヘビを恐れることの意味の一部は、ヘビを避けるとかの特徴的行動が続くことだからである。しかし、ヴィトゲンシュタインは行動主義者ではない。彼は恐怖の意味が恐怖の行動であるとは決して言わない。彼は恐怖に典型的行動が起こらない場合を認めている。たとえば、敵を前にして恐怖を抑えるボクサーの例。」（ルービンスタイン, p. 99.）
- (18) 「犬についての心の像は、哺乳動物、肉食獣、忠実さ、あるいは危険などを表わせる。」（ルービンスタイン, p. 114.）
- (19) 黒崎 宏「パラダイム論の必然性」『科学基礎論研究』1979年 Vol. 14(2), p. 48.
- (20) Apel, K. O., *Towards a Transformation of Philosophy*, RKP, 1980 参照。
- (21) C. レヴィ=ストロース, 伊藤 見訳「構造主義と人間科学」『現代思想』1973年 5月号, pp. 111~125。その経済学版として中堂 [22] を参照されたい。また、歴史学のアナール派も興味深い。

参考文献

- [1] M. フリードマン, 佐藤隆三・長谷川啓之訳『実証主義的経済学』富士書房, 1978年。
- [2] P. K. ファイヤアーベント, 村上陽一郎・渡辺 博訳『方法への挑戦』新曜社 1981年。
- [3] Gellner, E., *Words and Things*, RKP, 1959.
- [4] Hollis & Nell, *Rational Economic Man*, Cambridge U. P., 1976.

- [5] N. R. ハンソン, 村上陽一郎訳『科学理論はいかにして生まれるか』講談社, 1971年。
- [6] 菱山 泉「A. ロンカリアのヴィトゲンシュタインとスラッファの関係に関する所説についての一試論」『経済論叢』, 第118巻5・6号 pp. 115~130。
- [7] Hutchison, T. W., *The Significance and Basic Postulates of Economic Theory*, Macmillan, 1938.
- [8] Knight, F. H., “‘What is truth’ in Economics?” *J. P. E.* Feb., 1940, pp. 1~32.
- [9] 黒崎 宏『科学と人間』勁草書房, 1977年。
- [10] 黒崎 宏「ウィトゲンシュタインの哲学観」『理想』, 1974年3月号, pp. 1~11.
- [11] T. クーン, 中山 茂訳『科学革命の構造』みすず書房, 1971年。
- [12] Latsis, S., (ed.), *Method and Appraisal in Economics*, Cambridge U. P., 1976.
- [13] Machlup, F., *Methodology of Economics and Other Social Sciences*, Academic Press, 1978.
- [14] Nagel, E., *The Structure of Science*, Harcourt, 1961.
- [15] Pitkin, H. F., *Wittgenstein and Justice*, Univ. of California Pr., 1972.
- [16] Phillips, D. L., *Wittgenstein and Scientific Knowledge*, Macmillan, 1977.
- [17] A. ロンカリア, 渡会勝義訳『スラッファと経済学の革新』日本経済新聞社, 1977年。
- [18] Shackle, G. L. S., “Evolutions of Thought in Economics,” *Banca Nazionale Del Lavoro Quarterly Review*, 1980, no. 132, pp. 15~27.
- [19] 佐藤隆三「ラカトスの MSRP と経済学方法論・経済学史(L)(T)」『社会科学の方法』お茶の水書房, 1977年5, 6月号, pp. 1~7, pp. 11~16。
- [20] 種村季弘「賃金の作り方」大江他編『交換と媒介』岩波書店, 1981年, pp. 129~168。
- [21] S. トゥールミン, A. ジャニツク, 藤村龍雄訳『ウィトゲンシュタインのウィーン』TBSブリタニカ, 1978年。
- [22] 中堂幸政「中東の経済と社会」『世界経済』, 1981年7月号, pp. 11~29。
- [23] 富田重夫『経済学方法論』日本評論社, 1974年。
- [24] L. ヴィトゲンシュタイン, 藤本隆志・坂井秀寿訳『論理哲学論考』法政大学出版局, 1968年。
- [25] P. ウィンチ, 森川真規雄訳『社会科学の理念』新曜社, 1977年。
- [26] 山田一雄「経験科学としての経済学」『思想』, 1956年, 9月号, pp. 59~72。

1981.10.3 脱稿

(後期課程第2年度生経済政策 小松雅雄教授研究指導)